

出題分析			
試験時間	90分	配点	学部による*
		大問数	3題
分量（昨年比較）	[減少 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>難易度が高い大問が2題も出題された昨年度と比べれば若干易化したが、今年度も2(2)のような難問が出題されていて、解きにくいセットとなっている。1や3の標準問題を確実に解き切ってほしい。これらを計算ミス等で落とすと他の受験生に大きく差を付けられてしまうだろう。昨年度の2では受験生自身に初期設定を委ねる問題が出題されたが、今年度の3もそれと同系統の問題である。阪大に合格するためには文系といえどもこのような問題を完答することが必要であるかもしれない。難易度の高い問題を捨て、標準レベルの問題で確実に得点を稼ぐようにしたい。なお、1は理系との共通問題であった。</p>			

※ 募集要項を参照。

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
1	〈記述形式〉 平面ベクトル ・内積 ・線分の長さ	平面ベクトルに関する問題。(1)は $\cos \angle AOB$ の値がすぐにわかるので、内積の定義を用いる。(2)は点Rが直線OB上にあるので、 \overrightarrow{OB} の実数倍を考える。その後は直線ARとOPが直交することから、 $\overrightarrow{AR} \cdot \overrightarrow{OP} = 0$ であることを利用すると、線分ORの長さを t を用いて表すことができる。(3)は(2)の結果を利用するが、計算が煩雑になるので落ち着いて処理したい。	標準
2	〈記述形式〉 数列 ・漸化式 ・数列の和 ・数学的帰納法	与えられた漸化式を利用して、数列の和に関する性質を証明する問題。(1)は与えられた漸化式を用いれば、すぐに証明できる。(2)はかなり難しく、パズル的な要素がある。解答では数学的帰納法を用いて示したが、どういった方針であれ、(1)で示した式をどのように用いるかがポイントである。数列の和をうまく分解してまとめ直すと解くことはできるが、そのことに試験時間中に気が付くことはかなり難しかっただろう。	難

2025 大阪大学（前期）数学（文系）概評

3	〈記述形式〉 微分法 ・接線 ・3次関数の最大値 積分法 ・面積	座標平面における面積に関する問題。対称性から、接点 P は $x > 0$ にある場合のみを考えるとよい。S と T をそれぞれ計算して求めてもよいが、 $S+T$ が三角形の面積になることに気が付けば計算量を減らせる。S-T は 3 次関数で表されるので、微分を用いて増減を調べることで最大値が求まる。	標準
---	---	--	----

過去 3 年間の出題範囲

年度	数学 I				数学 A				
	方程式・不等式	集合と論証	2次関数	図形と計量	場合の数 確率	平面図形	数学と人間の活動		
2025									
2024			[1]				[3]		
2023			[1]						
年度	数学 II					数学 B	数学 C		
	高次式	複素数	図形と方程式	三角関数	指数対数	微積	数列、 数学的帰納法	平面ベクトル	空間ベクトル
2025						[3]	[2]	[1]	
2024						[1]	[3]		[2]
2023			[1], [3]	[1]	[2]	[2]		[3]	

※ []内の数字は大問番号, ()内の数字は小問番号をそれぞれ表す。

合格のための学習法

今年度も一部に難易度の高い問題が出題されているが、このような難問の存在を気にすることなく出題範囲のすべてを万遍なく学習してほしい。計算力の鍛錬も重要である。加えて、結論の数値や式を単に求めるだけでなく、結論への道筋を論理的に説明する解答作成の練習もしておきたい。文系にしては証明問題の比率も大きいので、論証力の養成も必要である。ここ数年、受験生自身に初期設定を委ねる問題も出題されているので、この種の問題も十分に対策しておきたい。